生誕120年 初代武蔵野市長・荒井源吉（あらいげんきち）が遺（のこ）したもの

**小美濃安弘新市長による新たな市政がスタートした武蔵野市。
初代の武蔵野市長は、戦後の混乱期から高度経済成長期へと向かう昭和22（1947）年から
16年にわたって市の発展を支えた荒井源吉でした。
初代市長は今の武蔵野市に何を遺（のこ）したのか、生誕120年の節目に振り返ってみましょう。**

武蔵野町から武蔵野市へ 市制施行後の初代市長が誕生

武蔵野市の初代市長を務めた荒井源吉は、明治37（1904）年、武蔵野村（現在の武蔵野市）に生まれました。家庭環境や幼少期についての史料はほとんど残されていませんが、慶應義塾大学経済学部を卒業後、昭和13（1938）年に武蔵野町役場に入庁し、会計や財務などの業務に携わっていたことが記録に残っています。

その後、会計課長だった昭和22年3月に町役場を退職して武蔵野町長に当選。その年の11月に武蔵野町は市制施行により武蔵野市になり、荒井は初代武蔵野市長となります。荒井が市長となったのは第二次世界大戦の終戦からわずか2年後のこと。当時、市の人口は6万3486人。いまだ戦後の混乱が続く中、戦後復興と市民の生活向上に向けた険しい市政のスタートでした。

市に昇格したまちとして、荒井が最初に取り組んだのが、上下水道事業などの都市基盤の整備でした。どちらも昭和26（1951）年に事業に着手し、水道については昭和29（1954）年に吉祥寺地区から給水が始まり、西窪（西久保）地区と関前地区、境地区にも広がっていきました。一方、下水道に関しては、地下の工事や排水先の河川の改修などに時間を要したため、排水が可能となるのは昭和40年代半ばになってからでした。

▲荒井源吉 元市長（武蔵野市蔵）

また、小学校給食を昭和23（1948）年から開始するなど、子どもの教育環境の整備にもいち早く取り組んでいます。当初は牛乳のみ、補食（おかず）のみの給食を経て、昭和30年代に入るとすべての小学校で完全給食が実現するようになります。

昭和22年に国が公布した教育基本法により、6カ年の小学校と3カ年の中学校を義務教育とする「6・3・3制」が導入され、市内の人口増加に対応するためにも新たな小・中学校の建設が必要になりました。そんな中、昭和29年には市の決算が赤字となり、その翌年に開校予定だった井之頭小学校と境北小学校（後に桜堤小学校と統合して現在の桜野小学校に）の建設にあたって約1億円の赤字が発生することが見込まれました。

そこで市は、市立学校建設資金に充てるための公債を発行し、市報を通じて市民に呼びかけたのです。当時、市民から「愛市公債」と呼ばれたこの公債は5回発行され、市民から寄せられた総額は2億5316円にのぼりました。子どもたちの教育が何より大切と考えた市民の「愛」が感じられるエピソードです。

また、税務署や簡易裁判所、区検察庁、保健所など、国や都の施設も市内に設置され、ごみやし尿の収集処理もスタート。郊外都市としてのさまざまな機能が徐々に整えられていきます。

町の名は……複雑な番地を整える「町名整理」に着手

荒井市長時代の取り組みとして記しておきたいことの一つとして、「町名整理」事業も挙げられます。武蔵野市では、一つの番地に多くの家が建ち並び、番地の少ない西窪でもおよそ800番台、最も多い吉祥寺ではおよそ3000番台まで存在することから、住所が分かりにくく混乱が生じていま

取材・文／さくらい伸

した。たとえば、当時の「吉祥寺３００番地」台は吉祥寺の駅前ではなく三鷹駅北口だったため、訪れた人が困惑することもあったといいます。

こうした問題を解消するため、市は市制施行から6年後の昭和28（１９５３）年に「武蔵野市町名整理調査委員会」を立ち上げました。町名整理委員会や各地区で行われた町名整理懇談会などを通じて、市民も交えた議論を何度も重ねながら、「この場所にはどのような町名がふさわしいのか」が検討されていきました。当時の「市報むさしの」には、この町名整理地域懇談会の様子が取り上げられ、昭和28年公開の映画『君の名は』にかけて「町の名は」の文字が書かれています。町名案が記載された「町名整理図」は第1次案から第8次案まであり、順を追っていくと現在の住居表示がどのような変遷を遂げて変わってきたのかが分かり、興味深いものがあります。

▲町名整理前 武蔵野町の小字（『武蔵野の地名』より）

▲「市報むさしの」昭和32年6月15日号より

時代は戦後の復興期を経て高度経済成長へと向かい、市内では都営住宅や公団住宅の建設も進み、昭和32（１９５７）年には市の人口は10万人を突破。その翌年、戦後最大級の台風22号で市内が水害により大きな被害を受けた際には、荒井市長が災害対策の陣頭に立ち、「復旧資金貸付条例」を制定するなど、その後の災害対策の素地をつくりました。懸案の町名整理については、市議会で町名を変えるための条例が可決され、昭和37（１９６２）年、ついに町名整理が実施。事業の開始から10年の歳月を経ての実施となりました。

温厚な人柄ながら まちの未来像を見据えた 実行力も

ほかにも、荒井市長時代には、三鷹駅北口広場の整備、藤村学園の借地権確保による吉祥寺駅周辺の都市計画など、その後のまちの発展の基礎となる取り組みを数多く行っています。

荒井は4期市長を務めたのち、昭和38（１９６３）年に退任。昭和55（１９８０）年には武蔵野市名誉市民に推挙され、昭和58（１９８３）年、79歳で死去しました。同年10月4日、武蔵野市営緑町体育館で市葬が執り行われた際に配布されたしおりには、荒井市長の数々の功績や弔辞が記されています。その中から、葬儀副委員長を務めた望月彰夫武蔵野市議会議長（当時）の弔辞の一部を抜粋しましょう。「お人柄は、温厚、篤実そのものでございますが、その政治姿勢は常に10年先、20年先を見通され、市議会においてもどんなに苦しい財政状況であっても、必要な施策は実行すべしと文字通り誠意をもって説明され、とことん論議を尽くしたうえで実行に移すという方であり、与野党を問わず、その真摯な姿勢に敬服いたしておりました」

このしおりには印刷される前の原本があり、現在「武蔵野ふるさと歴史館」に所蔵されていますが、そこには葬儀委員長の土屋正忠武蔵野市長（当時）による草稿にあたる文言も確認できます。「荒井さんは武蔵野に生まれ武蔵野に育った生粋の武蔵野っ子として市民から源ちゃんの愛称で親しまれ数々の大きな功績を残されました」

別の文書では、生前おすしが好物だったことが分かる記述もあり、市長としての大きな功績だけでなく、「おすしが好きな生粋の武蔵野っ子の源ちゃん」という親しみやすい一面も垣間見えます。

戦後の混乱期から高度成長期へ、急激に人口が増加し、都市化が進んだ「初期の武蔵野市」を支えた荒井源吉の遺したものに思いをはせながら、新たなまちの形を見据えていきたいものです。

参考文献／『武蔵野市百年史』（武蔵野市）、『武蔵野の地名』（武蔵野ふるさと歴史館）
取材協力／武蔵野ふるさと歴史館